

報 告

学術用語としての「里山」の利用増加

新潟大学 朱鷺・自然再生学研究センター

中 津 弘

Increased uses of the word “satoyama” as an academic term. Hiromu Nakatsu *(*Center for Toki and Ecological Restoration, Niigata University*)

要旨:「里山」の語がどのように学術的に利用されてきたかを知るために、学術情報データベースを利用して、1950～2011年の期間について、里山の語をタイトルに含む記事を調べた。里山の語を含む記事は、その件数、収録記事の総数に占める割合とも、1990年代後半に急増を遂げていた。増加の背景には、地域の里山の改変や身近な生物の減少、生態学分野での多くの解説書の発行に加えて、国の計画などに里山が盛り込まれたことがある。この状況の中で里山という語は普及したのであろう。

キーワード:学術用語、里山

Keywords: academic term, satoyama

はじめに

薪炭林や農用林として利用されてきた二次林、水田、草地、ため池などから構成される伝統的農村景観は、しばしば里山あるいは里地里山と呼ばれる(田端, 1997; 武内ほか, 2001)。里山あるいは里地里山(以下、主に里山とする)は近年、多くの研究のテーマやフィールドとして選ばれており、テレビや新聞、インターネットなどのメディアで扱われる頻度も高くなっている。しかしながら、実際に里山という用語が広く認識され使われるようになったのは比較的最近のことである。

研究者やメディアは、特定の分野や概念、技術について、必ずしも長期間にわたって同じように扱い注目し続けるわけではない。里山の研究や保全が重要であるだけに、里山がどのように文字媒体で扱われてきたかを知ることは有益である。本稿では、里山に関連する学術記事数の推移を可視化する試みについて報告するとともに、用語の選

択・利用の背景についても考察する。

記事検索とデータ利用の方法

国立情報学研究所が提供する学術情報データベース CiNii (URL: <http://ci.nii.ac.jp/> 2013.9.1～8 参照)を利用して、里山に関連する記事情報を収集した。「タイトル」に「里山」を含むという条件で「論文検索」を実行し、ヒットした論文・記事のタイトルと、著者、掲載雑誌名、発行年のデータを1件ずつ Microsoft Excel 2007 ファイルに入力して、作業用データベースを作成した(CiNiiでは「論文検索」としているが、学術情報データベースには一般向け雑誌の記事も含まれることから、以下ではヒットした論文・記事を単に記事とする。特に学術誌に掲載されたものに言及する際にのみ、論文とする)。なお、各記事で設定されたキーワードは検索対象とはしなかった。

本研究は、里山関連記事の大まかな推移を知る

ことを目的とするため、タイトルおよび掲載雑誌から該当分野の判定を行い、次に示す分野のいずれにも当てはまらないことが明確な記事を集計対象データから除外し、残ったものを里山関連記事とした。すなわち、生態学、自然観察、自然体験、環境教育、リクリエーション、農林業、農村計画・都市計画、地域づくり、造園、安全・防災、詩歌などの文芸素材、森林医療を対象とした。タイトル中に「亜里山」や「千里山」のような語を含むために検索時にヒットするものの、里山そのものは扱っていないと考えられる記事についても除いた。加えて、CiNiiを用いて、各年で雑誌に掲載された全ての記事数（収録記事総数）も集計しておいた（URLは前述、2018.1.26参照）。新しい記事や、著しく古い記事は学術情報データベースに登録されていない可能性があるため、1950年から2011年までを記事検索の対象期間とした。

作業用のExcelデータベースを利用して、各年で掲載された里山関連記事数および里山関連記事の掲載雑誌数を集計し、特集誌面を設けた雑誌をリスト化した。また、1950年から2011年の間の各年について、里山関連記事数を収録記事総数で除して、里山関連記事の割合を算出した。これは、収録記事総数の増減が里山関連記事数の変化に及ぼす影響を取り除いて、里山関連記事割合自体が時期を追って変わってきたかを明らかにするためである。

検索の結果

記事数の推移

1950～2011年の期間でヒットした里山関連記事は合計1,650件であった。年あたりの記事数は、1950年代から1990年代半ばまでは0件から12件の範囲で推移したが、1990年代後半に急増し、特に2000年以降は全ての年で70件以上の記事が

見受けられた（図1）。また、記事を掲載した雑誌数は、1996年までの各年では10誌を超えることはなかったが、1997年の13誌以降急増した（図2）。1990年以降の掲載記事数は計1,614件であり、里山関連記事の全体の97.8%を占めた。

収録記事総数に占める里山関連記事割合は、期間中増大しており、特に1990年代後半から高くなっていった（図3）。なお、収録記事総数は、初めの1950年には86,618件で、その後増加して、2001年に最大の714,939件に到達した上で、減少に転じて2011年には580,040件となっていた。

年代ごとの記事数と概要

1950年代の里山関連記事は、三井ほか（1955）の1件が認められるのみであった。これは、酪農飼料となる草本の増産のために野外実験を行い、二次林の伐採方法の再考を提案するものであった。続く1960年代には計5件の記事があった。その中には「林野時報」の記事が3件あり、いずれも林業振興を図る林野庁の里山再開発事業に関連するものであった。1970年代も記事は計8件と少数であったが、「農林統計調査」が、里山の活用についての特集を組んでいる。

1980年代には掲載記事数は計23件となり、「岐阜大学農学部研究報告」で林・江本（1985, 1986, 1987）が里山利用モデルの開発を試み、都市計画や自然環境保全について議論している。1987年の東北大学「川渡農場報告」では、里山利用によるニホンジカ（*Cervus nippon*）生産の基礎的研究の特集を組んで、多くの記事を掲載している。また、中川（1987）は、広葉樹造林のための資料づくりという観点から、クヌギ（*Quercus acutissima*）ーコナラ（*Quercus serrata*）林で植生調査を行い、樹木の成長の評価を試みている。

里山関連記事数は、1990年代には計197件であった。1990年には朝日新聞社の「科学朝日」が、

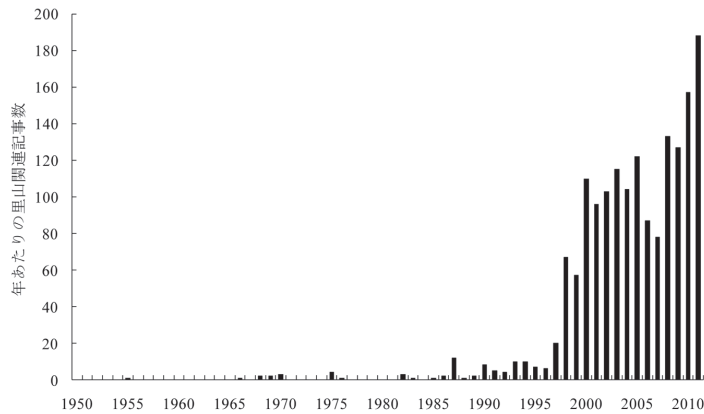


図 1. 年あたりの里山関連記事数の推移. 1950～2011年の期間で掲載された、タイトルに「里山」の語を含む記事の件数を年ごとに示す.

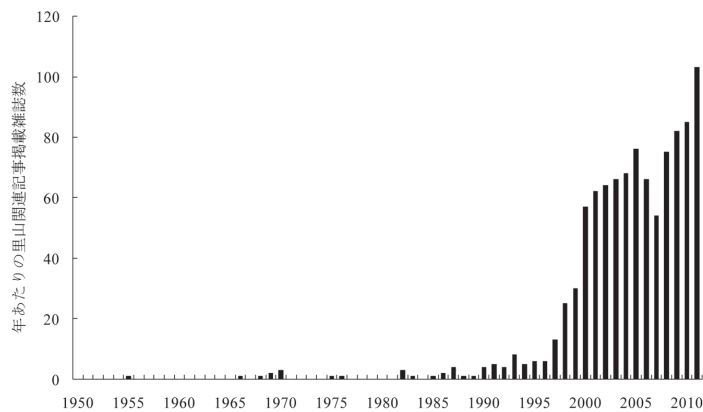


図 2. 年あたりの里山関連記事掲載雑誌数の推移. 1950～2011年の期間で、タイトルに「里山」の語を含む記事を掲載した雑誌の数を年ごとに示す.

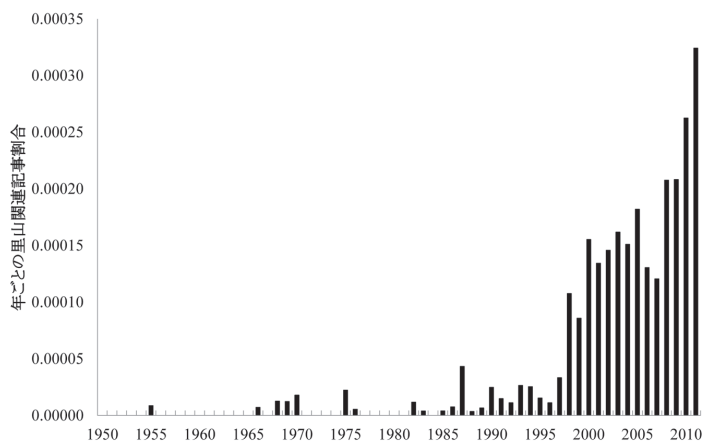


図 3. 年ごとの里山関連記事割合の推移. 1950～2011年の各年について、収録記事総数に占める里山関連記事の割合を示す.

1994年には関西自然保護機構の「関西自然保護機構会報」（「地域自然史と保全」の前身）がそれぞれ里山関連の特集誌面を編成している。1998年には日本造園学会の論文集である「ランドスケープ研究」も特集を組み、多くの論文を掲載している。1990年代後半には、「明日への文化財」、「森林文化研究」、「母の友」、「プランタ」、「緑の読本」、「山と溪谷」も特集誌面を設けた。

2000年代の記事数は計1,079件であった。2000年代にも多くの雑誌が里山関連の特集を行った。即ち、「岳人」、「かんきょう」、「観光文化」、「グリーン・エージ」、「ぐりーん・もあ」、「現代林業」、「昆虫と自然」、「砂防と治水」、「システム農学」、「森林科学」、「生活協同組合研究」、「東北開発研究」、「東北学」、「都市問題」、「日本緑化学会誌」、「農業と経済」、「農林統計調査」、「プランタ」、「緑の読本」、「林野時報」などである。また、2000年以降の記事では、里山コモンズ、GIS、リモートセンシングの用語もタイトルに含まれるようになった。2003年以降は竹林に関連する記事が増加した。

2010年、2011年においても年あたりの記事数はさらに増加している（図1）。

雑誌ごとの記事数

1950～2011年の期間中に計15件以上の里山関連記事を掲載した雑誌と記事数を表1に示す。最も多くの記事を掲載してきたのは日本造園学会の論文集「ランドスケープ研究」であり、その前身である「造園雑誌」が1991年、1992年に掲載した2論文を合わせると、掲載記事数は94件となる。他方で、「日本生態学会誌」は2005年に1件、「植生学会誌」は2005年、2008年に各1件、「景観生態学」も2009年と2011年に各1件の掲載論文があったのみである。

表1. 里山関連記事を多く掲載した雑誌と掲載記事数. 計15件以上の里山関連記事を掲載した各雑誌について、雑誌名の五十音順で、掲載記事数と掲載があった時期を示す。

掲載雑誌名	掲載記事数	掲載時期
「学術講演梗概集」	35	1991～2011年
「関西自然保護機構会報・会誌」	15	1994～2011年
「グリーン・エージ」	15	1999～2011年
「グリーン・パワー」	57	2000～2011年
「現代林業」	21	1999～2011年
「昆虫と自然」	21	1998～2011年
「山林」	16	1997～2011年
「週刊農林」	27	2001～2010年
「住宅建築」	29	2000～2006年
「森林科学」	19	1990～2011年
「千葉県生物多様性センター研究報告」	35	2010～2011年
「日本緑化学会誌」	16	1997～2011年
「農林経済」	18	1999～2007年
「プランタ」	19	1999～2005年
「別冊太陽」	18	2002年
「緑の読本」	29	1997～2008年
「モーリー」	16	2001～2008年
「ランドスケープ研究」	92	1997～2011年

考察

里山関連記事が1990年代後半に急増した背景として、特に1980年代後半から、我々の身近な自然環境の特性や価値に気づき、その変容や改変の問題を知る機会が増えてきたことが指摘される。

生態学の研究者や自然保護団体による情報発信の影響は大きかったであろう。「我が国における保護上重要な植物種の現状」（我が国における保護上重要な植物種及び群落に関する研究委員会種分科会、1989）が出版されたのが1989年であり、身近な場所に生育していた様々な植物が減少していることが知られるようになった。1980年代後半以降は里山をテーマにした書籍の出版が相次ぎ、守山（1988, 1997）、石井ほか（1993）、田端（1997）は里山の生態学的な特性や保全の問題を記した。重松（1991）は、市民向けに里山の保全管理のた

めの解説書を著している。また、研究書ではないが、今森（1995）の写真集「里山物語」が出版され、里山の審美的な要素や特性が改めて一般の目に触れやすくなったのも同じような時期である。2000年代に入ると、武内ほか（2001）や広木（2002）、日本自然保護協会（2001）、有岡（2004a, 2004b）による里山の研究・解説書も出版された。

国内各地域で自然環境を改変する構想が一斉に出てきたのも1980年代後半の出来事であった。1987年の「総合保養地域整備法」（リゾート法）制定後に、ゴルフ場やスキー場、リゾートホテル、さらに道路他の付随施設などの乱開発が計画され、国土庁（当時）が承認したリゾート構想対象地域は国土面積の16.6%に及び、自然環境保全などの観点からこれらに反対する市民運動が展開された（リゾート・ゴルフ場問題全国連絡会、1996, 1998）。リゾート計画は、各地域の身近な自然環境を見直すきっかけになったであろう。

他方で、国や地方自治体は1991年以降レッドデータブックを発表し、環境省のレッドリストも初版以降、定期的に改訂されてきた。以前は普通に見られたサンバ（*Butastur indicus*）、トノサマガエル（*Rana nigromaculata*）、メダカ（*Oryzias latipes*）、オオウラギンヒョウモン（*Fabriciana nerippe*）などもこれらのリストに記載され、身近な里山の変容について関心が高まったと言える。

国の計画・方針では、1987年に閣議決定された「第四次全国総合開発計画」（四全総）が、奥山天然林や人工林などとともに里山林について紹介・記述している。里山林を学習や交流などの拠点とし、保全に留意しつつ総合的利用を図っているが、皮肉にも同じ四全総には、リゾートや学園研究都市、高速道路網整備などの開発構想が盛り込まれていた（山村、1989）。また、1992年にリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議（地球サミット）で調印された生物多様性条約

を受けて、国は1995年に「生物多様性国家戦略」を策定し、2002年の「新・生物多様性国家戦略」からは里山保全の問題を重視してきた。生物多様性国家戦略での里山（同戦略では「里地里山」と表記）の記述は、里山の用語としての普及を大きく進めたであろう。これらの記述は、特に行政関係者やコンサルタントの間での里山の認知拡大に有効であったかもしれない。

このような状況の中で、我々の身近にある二次的自然が里山と呼べること、その里山は人為的管理によって多様な生物相を擁してきたこと、近年の管理放棄や改変によって里山の生物多様性が失われつつあることが徐々に知られ始めた。研究者やジャーナリストが調査や取材を行って情報発信を試みる機会が増え、雑誌編集者も里山関連の特集を積極的に企画し、認知が連鎖的に拡大してきたと思われる。詩歌の素材が里山に求められ、医療分野でも里山という表現が利用されるという状況は、里山という言葉が人口に膾炙し、現在多くの分野に里山が関わるようになっていくことを示している。

認知が広まった里山を実際に記事タイトルに含めるかどうかには、各著者がどのような観点で記事を書くかが関わってくるであろう。還元論的に生態学的パターン・プロセスを記述・分析する場合と、全体論的あるいは機能論的に人間が主体となった土地の利用と管理を考える場合とでは、対象とする場・空間のとらえ方や呼称がしばしば変わりそうである。前者の観点を用いるならば、群落名や微環境タイプ名が記事タイトルに使われることが多くなり、後者の観点による二次的自然についての研究では、近年は里山の語がタイトルに含まれやすいであろう。こうした観点の違いが雑誌ごとの里山関連記事の件数の多寡と関わっていると考えられる。

謝辞

匿名査読者には、原稿について数多くの有用なコメントを頂いた。御礼申し上げる。

引用文献

- 有岡利幸. 2004a. 里山 I. 262pp. 法政大学出版局, 東京.
- . 2004b. 里山 II. 265pp. 法政大学出版局, 東京.
- 林 進・江本祐子. 1985. 都市近郊里山地帯の最適利用モデルの策定に関する研究 I: 実態のモデル化手法. 岐阜大学農学部研究報告, 50: 85 - 101.
- ・——. 1986. 都市近郊里山地帯の最適利用モデルの策定に関する研究 II: 都市成長と里山空間の変貌: 秋田県横手市, 山梨県甲府市, 大阪府高槻市, 及び河内長野市の実態分析. 岐阜大学農学部研究報告, 51: 91 - 109.
- ・——. 1987. 都市近郊里山地帯の最適利用モデルの策定に関する研究 III: 農地及び森林の利用・保全: 秋田県横手市, 山梨県甲府市, 群馬県赤城村, 滋賀県甲賀町, 大阪府高槻市及び河内長野市の実態分析. 岐阜大学農学部研究報告, 51: 111 - 136.
- 広木詔三 (編). 2002. 里山の生態学 その成り立ちと保全のあり方. 333pp. 名古屋大学出版会, 名古屋.
- 今森光彦. 1995. 里山物語. 159pp. 新潮社, 東京.
- 石井 実・植田邦彦・重松敏則. 1993. 里山の自然をまもる. 171pp. 築地書館, 東京.
- 三井計夫・三井豊穂・平野孝雄・桜井茂作. 1955. 平地林, 里山の択伐作業に伴う下草改良に関する研究 1. 関東東山農業試験場研究報告, (7): 175 - 190.
- 守山 弘. 1988. 自然を守るとはどういうことか. 260pp. 農山漁村文化協会, 東京.
- . 1997. 水田を守るとはどういうことか. 205pp. 農山漁村文化協会, 東京.
- 中川重年. 1987. 丹沢南斜面の里山地帯におけるクヌギ・コナラ林を構成する広葉樹数種の成長. 神奈川県林業試験場研究報告, 14: 27-59.
- 日本自然保護協会 (編)・石井 実 (監修). 2001. 生態学からみた里やまの自然と保護. 242pp. 講談社サイエンティフィク, 東京.
- リゾート・ゴルフ場問題全国連絡会 (編). 1996. 検証・リゾート開発 東日本篇. 291pp. 緑風出版, 東京.
- . 1998. 検証・リゾート開発 西日本篇. 333pp. 緑風出版, 東京.
- 重松敏則. 1991. 市民による里山の保全・管理. 74pp. 信山社サイテック, 東京.
- 田端英雄 (編). 1997. エコロジーガイド 里山の自然. 199pp. 保育社, 大阪.
- 武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史 (編). 2001. 里山の環境学. 257pp. 東京大学出版会, 東京.
- 我が国における保護上重要な植物種及び群落に関する研究委員会種分科会. 1989. 我が国における保護上重要な植物種の現状. 320pp. 日本自然保護協会・世界自然保護基金日本委員会, 東京.
- 山村恒年. 1989. 自然保護の法と戦略 第2版. 446pp. 有斐閣, 東京.